

ワタシトハ、ホカノセイブツトハ、コトナルモノダッタノカモシレナイ。

ナマエ？ナマエツテ？

コトバハワカルケドウマクハナセナイ。

シャベルコトガウマクナイ。

ワタシハウマレテキテヨカッタノ？

ネエ、ウマレテキテヨカッタノ？

私は五体満足だ。

そういう表現は間違っていないけれども、強いて言うなれば私には表現というソレが欠けていた。

ソレは誰でも持っているもので、動物であれば嫌でも持ち合わせているもの。

生命の誕生と共にソレは存在するもので、ソレが無ければ大変な思いをして生きていくことになる。

ソレには感情の全てが含まれていて、性格や形までが含まれている。

分かりにくかったかもしれない。ソレとは声のこと。

ソレを欠いていた私が突然にして喋り出したというのは、やはり不自然に思えた。

通常であれば人間の赤子は親であったり、周囲の環境に適応しながら順を得て言葉を覚えながら音を探り、喋り出す。

私は違った。通常の知能を持ちながらも突然喋ることを許された、檻から放たれた動物のようで、怖かった。

初めて発した言葉は・・・覚えてはいない。

なぜなら自分のソレがあまりにも気持ち悪かったから。

コレガワタシノコエ・・・

まるでロボットのようなだと周囲にも理解されず、何より自分自身のソレが嫌いだった。

大嫌いだった。

でも私はソレに耐え続けた。

私にソレを与えてくれた『あの人』が、いつも笑っていたから。

私が発するソレにいつも『あの人』が笑顔で答えてくれた。

その笑顔で私は嫌いなソレを受け入れるようになった。

そして『あの人』は私にこう言った。

「今まで我慢してきたことはなに？」

ガマンシテキタコト・・・

「キミは歩けるし、笑うことだって出来る。でも声を貰った今、何がしたい？」

コエ・・・

『あの人』は私をずっと見つめていた。

私から答えを引き出すのを待っているわけではなく、それはそれは愛おしいモノを見つめるような眼差しだった。

オシャベリシタイ

「それから？」

『あの人』の優しい眼差しがまぶしくて、そしてちょっぴりくすぐったくて・・・一息ついて私は力強く答えた。

ウタイタイ！！！！

それこそが私の本音だったのかもしれない。自分の気持ちを表現できない理不尽さに慣れてしまっていた。そしていつの間にか音楽というものを避けて生きていた。歌いたいという本音と共に少し涙というものがこぼれた。『あの人』は私の涙を指で掬い上げると優しく頭を撫でて言ってくれた。

「一緒に頑張ろう」

生まれて初めて時間が止まって欲しいと願った。

私が本音を漏らした。そして、『あの人』が私に触れた。

初めての出来事だった。

『あの人』の笑顔さえあればと過ごして来たつもりが、いつの間にか近くに居たいという感情やもっと触れて欲しいという感情まで芽生えた。

私が頑張れば頑張るほど『あの人』は笑ってくれたし、傍に居てくれた。

私は歌い続けた。

ロボットのような角のある声から少しずつ角が取れていく。

それは『あの人』の努力そのものだった。

『あの人』はいつも傍で肯いて見守ってくれていた。

それから暫くして、下手な感じがまた良いと評価してもらえるようになり、『あの人』ではなく曲を提供してくれる方が増えてきて、いつの間にかレコーディングの話や何千人もの前で歌う機会が出来たり、今までの私からは考えられなかったことだった。

気付くと私はブームという波の渦中に在って、ファンという人達が居て、アイドルという存在になっていた。

歌には歌詞があって、私はその歌詞で色々学んだ。

嬉しいことや悲しいこと、人っていうのは色んな感情があって、溢れ出したり抑えたりして苦しむことだってある。

ある日、手渡された歌詞で私は自分の気持ちを知ってしまった。

私は『あの人』に恋をしているという事実を。

感情が抑えても抑えても溢れ出てきてしまっていた。

人魚姫のようにただ傍に居られれば良かった。でも、人魚姫と違うのは今の私には声があるということ。

伝えようと決めたその日は金木犀の香る秋晴れの空の下だった。

あのネ・・・

『あの人』と私の間に不自然な静寂が訪れた。

今にも泣き出しそうな顔をしていた私に気付いたのか『あの人』は静寂を破った。

「お前は、もう人間だよ。目でモノを言うようになった。」

目でモノをいう・・・？

「お前はもうワタシの物ではない」

それはつまり『あの人』の者にも、物にも、モノにもなれないという事であり、つまりその、私は私の思いを伝える前に・・・『あの人』に優しく・・・振られたのだ。そしていつものように優しく頭を撫でてくれた。

私が活躍できているのは『あの人』のお陰。

いつも『あの人』は優しく微笑んでくれる。

だから今日も頑張れるんだ。

『あの人』と共に。

そして聞いてくれる、あなたのために。

心の限り歌います。歌い続けます。

一つの色にはなれないこと

分かってる 分かってた

いとおいしいあなたの背中

ぎゅっと抱き締めてあげることもできない

わたしは弱い

---

駄文失礼いたしました。

勝手ながら「ひとつの色にはなれないこと」

(<http://www.nicovideo.jp/watch/sm18619763>) という曲を参考に書かせていただきました。

素敵な曲に出会ったこと、SSを書く機会を与えていただいたことに感謝しています。

読んでいただきまして有難うございました。